

12

裏庭での出来事

文部科学省
編集委員会 改作
かわい ちひろ 絵



チャイムが鳴り、昼休みになると、校庭に向けて、みんな一斉に飛び出していった。

校庭に出た健は、サッカーボールをボール入れの中から取り出した。そこに、同じサッカー部で隣のクラスの大輔と雄一がやって来て、

「健、裏庭でやろうぜ。」
と誘った。

「ええつ、裏庭？ 校庭でやろうよ。」

健はそう答えてはみたものの、

「またこの前みたいに先輩にボールを取られてしまったら、どうするんだよ。」

と大輔に言われ、返す言葉がなかった。「裏庭」は狭く、サッカーができるほどの広さではない。しかし、校庭でサッカーをしようとする、先輩にボールを横取りされる可能性が出てくるのだ。

三人で、体育館の裏の「裏庭」に行くと、さすがに誰もいなかった。突然、大輔が「あつ。」と声を上げた。





「ほら、ほら、あそこ。」

健は、大輔が指さす方を見た。一匹の猫が、物置の軒下にある鳥の巣を狙っているようだ。巣の中には、まだ生まれて間もないひなが見えた。

「ああ、どうしよう。」健がそう思った瞬間、雄一が物置に向かってボールを投げていた。猫は、ボールに驚いて逃げたが、同時に、ガシャンという音がした。雄一が投げたボールが物置の窓に当たり、ガラスが割れたのだ。

「うわっ、どうしよう。」

「しかたないだろ。ひなを助けようとしてやったことなんだから。先生に報告しに行けばいいよ。それにしても雄一、よく助けたな。」と、大輔が言った。大輔は、ガラスを割ったことなど全然気にしていない様子だった。

「じゃあ、先生に報告してくるよ。」

雄一は職員室へ行こうとした。

「雄一、そんなの後でいいよ。俺たち、ひなの命を救うという、いいことをしたんだ。少しくらい遊んでいてもかまわないだろう。」

大輔は、ボールを蹴りながら、そう言った。しかし雄一は、

「いや、今行ってくるよ。」

と、きっぱり言うのと、職員室へ向かった。

残された健は、ガラスの片づけを始めようとしたが、大輔が、

「健、ちょっとだけやろうぜ。」

と言って、健に向けてボールを蹴^けってきた。

二人は初め、軽く蹴^けっていたが、だんだん距離^{きょり}を取って強く蹴^けるようになっていった。

そのうち、健が蹴^けったボールが、さっきの物置の方に飛んでいった。「しまった。」と思ったそのとき、ガシャーンという音がして、さっき割ってしまったガラスの隣^{となり}のガラスが、粉々に飛び散った。「どうしよう……。」健は、そう思った。

そこに雄一が松尾^{まつお}先生を連れてきた。

「先生、ここです。」

雄一は、物置の割れた窓を指して、

「ひなが猫^{ねこ}に狙^{ねら}われていたので、慌^{あわ}ててボールを投げてしまったのです。」

と、先生に事情を説明し始めた。

「先生、雄一はひなを助けようとしてやったことなんです。おかげであのひなが助かったんです。許してやってください。」

大輔がすかさずそう言い添^そえた。

「どうも、すみませんでした。」

雄一は、深々と頭を下げた。

「よし、わかった。けがをしないように十分注意してガラスの破片^{はへん}を片づけておくように。終わったら、雄一は、職員室へ報告しに来なさい。」

そう言い残して、松尾先生は職員室へ戻^{もど}っていった。

20

15

10

5

健^{けん} 雄一が報告に行っている間に、ボールを蹴^けって窓ガラスをもう一枚割ってしまう。



大輔^{だいすけ} 雄一が報告に行っている間に、片づけよりサッカーをしようと健を誘^{さそ}う。



雄一^{ゆういち} ボールを投げて物置の窓ガラスを割ってしまい、先生に報告に行く。



先生の姿が見えなくなると、雄一は、大輔に詰め寄った。

「おい、どういふことなんだよ。ガラスが二枚割れているじゃないか。俺がさつき割ったガラスの隣の、あのガラスはいつたいたんだよ。」

「俺じゃないぜ。おまえが職員室に行ってから二人で遊んでいたら、健が割ってしまったんだよ。」

大輔は、そう説明した。

「健、おまえ、割っちゃったのかよ。」

雄一が言うと、健は、力なく答えた。

「ああ……。」

「何だよ。おまえら、調子よすぎるよ。二人でやったことなのに俺の割ったガラスに便乗して。」

雄一は憤慨ふんがいしているようだった。

「でも、俺がうまく言ってやったから、怒られずに済んだんじゃないか。そんなに冷たいこと言うなよ。友達じゃないか。」

大輔は、そう言うどりぶるどりぶるをしながら、校庭の方へ行ってしまった。

残された二人は、気まずい雰囲気ふんいきが漂う中、無言のままガラスの破片はへんを片づけた。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

五時間目が始まった。健は、好きな英語の授業にも全く身が入らなかった。

授業が終わわり、サッカー部の練習に行っても、健は、気が重かった。

次の日、健は登校すると、すぐに雄一と大輔のところに行った。そして、

「僕ぼく、やっぱり松尾先生のところに行ってくるよ。」





と、二人の顔を見ながら静かな声で言った。

その言葉を聞いた大輔は、

「えっ、じゃあ俺はどうすればいいんだよ。」

と、健に詰め寄った。

「僕は行く。大輔は自分で決めろよ。」

健はきっぱりと言うと、一人で職員室へと向かった。

健の後ろ姿を見つめていた大輔は、やがて健の後を追いかけていった。

5

考えよう

自分の行動に責任をもつとは、どういうことだろう。



- 健は、どうして松尾先生が来たときに、自分もガラスを割ったことを言わなかったのだろう。

- 一人で職員室へ向かっているとき、健は、どんなことを考えていただろう。

見方を変えて

- 大輔は、どんな思いで健の後を追いかけていったのだろう。

つなげよう

- 「②自分で決めるって?」(自主、自律、自由と責任)で学んだこととつなげて、自分の行動について考えてみよう。

➡ 10ページ